

福井 健策（ふくい・けんさく）先生

弁護士(日本・ニューヨーク州)
骨董通り法律事務所 代表パートナー

弁護士(日本・ニューヨーク州)/日本大学芸術学部 客員教授
1991年 東京大学法学部卒業。1993年 弁護士登録。
米国コロンビア大学法学修士課程修了
(セゾン文化財団スカラシップ)など経て、
現在、骨董通り法律事務所 代表パートナー。
著書に「著作権とは何か」「著作権の世紀」(共に集英社新書)、
「エンタテインメントと著作権」全4巻(編集、CRIC)、
「契約の教科書」(文春新書)、「ネットの自由」vs. 著作権」
(光文社新書)ほか。専門は著作権法・芸術文化法。
クライアントには各ジャンルのクリエイター、劇団、出版社、
プロダクション、音楽レーベルなど多数。
東京藝術大学ほか非常勤講師、think C 世話人、
国会図書館審議会ほか委員・理事を務める。
<http://www.kottolaw.com> Twitter: @fukuikensaku



《講義概要》

著作権法、芸術文化法を専門分野とし、エンタテインメント業界の最前線で活躍する弁護士福井健策氏が、「ライブイベントとデジタル時代の著作権」をテーマに講義を行った。

講義ではまず、ダウンロード刑罰化施行の背景と論争、海賊版被害の実態、「デジタルシュリンク」について分かりやすく解説し、特にデジタル・ネットの普及によるコンテンツ産業の縮小化について、海賊版問題だけでなく適法な無料のコンテンツの増加が大きな要因であることを示し、「フリーとの戦い」の時代の中で新たなビジネスモデルを構築する必要があると指摘した。また、デジタルやネットで代替されやすい産業ほど売上が下落し、代替できない産業が売上が伸びている現状を示し、コンテンツ産業の中で唯一売上が上昇しているライブ産業について解説。漫画等様々なコンテンツのライブイベントの活況を示すとともに、ライブの特権性にマネタイズの可能性があると言及した。

続いて、著作権に関する重要な動きの一つである国際条約の TPP（環太平洋戦略的経済連携協定）について紹介し、米国政府が要求している知的財産に関する保護期間の延長や非親告罪化の概要と問題点について具体的に解説した。「流通を促進しつつ創作者に収益還元できる最適の知財ルールはどこにあるのか」「TPP が最適の乗り物なのか」「情報のルールメイカーは誰か」TPP が問いかける3つの重要な課題を示し、情報のルールについて日本の文化やコンテンツ産業の強みを生かした日本モデルを構築することができるのか、誰が考えどのように取り決めていくべきか、皆さんにも考えて欲しいと伝え、講義を締めくくった。

《受講生の感想》

●マンガも音楽も文化であり、文化とは世界中の国で異なるものである。文化がもともと違う国々が同じ条件を全員が承認することは難しい。なのでまずは日本は自分たちの歴史や文化を見直すべきだと思った。また、著作権の話になると“ユーザー”と“国”の動向がよく取り上げられるが、“制作者”となる人たちの主張や動きを知ることがあまりないと思った。著作権は誰のためにあるのか。よく考えながらこれからも自分なりに調べ、これからの動きにも注目していきたいと思いました。 立命館大学・産業社会学部・3 回生

●最も印象に残ったのは「デジタルで代用できるメディアコンテンツは売上を減らし、逆にデジタルで代用できないメディアコンテンツは売上を伸ばしている」というお話でした。具体例として福井さんはライブイベントを挙げられました。その他にも、著作権保護期間のお話も分かりやすい具体例を織り交ぜて説明してください、有意義な講義でした。

立命館大学・法学部・4 回生

●なぜ人は音楽を買わないのか、ライブやイベントの収入が増加している理由を考えることができた。また、著作物を今後どのように扱っていくのかを考えるきっかけにもなった。パロディをどこまで許可するのは統一されておらず、判断するのは難しいと思う。クリエイターの作品、収入を守りながら二次創作による新しい人材の発掘や販売促進が起こることが理想だと思う。情報についてのルールを国が扱うのか、企業が扱うのか、考えていきたい。

立命館大学・産業社会学部・2 回生

●著作権の問題やネットによるコンテンツ流通とパロディ文化等との間に生じる摩擦について大変分かりやすい説明で興味が湧いてきました。TPP の問題と絡めて、今後の知財分野にも関心を持っていきたいと思いました。グローバルスタンダードに乗ることばかりが本当に良いことなのかはしっかり考える必要があると思います。非親告罪化のようにその条約が自国が育んできた文化にどのような影響があるのかを自分なりに考えて、関心を持っていきたいと思いました。

立命館大学・産業社会学部・3 回生

●自分の知らなかった知識をどんどんインプットでき、世界のコンテンツ産業を取り囲む実情を垣間見ることができた。海賊版の被害が深刻であるとか、日本のコンテンツ産業が縮小し続けていることを日本からの視点だけでなく、海外からの視点を交えてお話くださったのは分かりやすく、自分の知らなかった情報だった。TPP の影響についてもよく理解できた。 京都産業大学・外国語学部・2 回生

●様々なコンテンツがデジタル化され、その売上が年々減少している中、ライブイベントだけは売上を伸ばしていることを知りました。人々は、様々なコンテンツがデジタル化され簡単に手に入れられる時代になったからこそ、その瞬間やそこに行かなければ手に入らないライブにお金を使うようになったのだなと思いました。そして、そこに新たなビジネスチャンスがあることも学びました。

立命館大学・産業社会学部・4 回生

